

Mさんの決断

「私は今六十歳ですが、まだ二十八本持っています。八十歳になった時、二十八本が自前の

元熊本日日新聞記者 村林 孝彦

「その時は歯科医師会から表彰状を差し上げる」とにしましよう」

旧臓、歯科医のMさんから医院名での封書が

届いた。「体調不良により、令和六年十一月×日をもつて閉院することになりました」とあつた。

しかし、私の『8028』の野望は七十九歳

一年ちょっと前、胃がんの手術をしたとは聞

にして潰えた。

いていた。術後はまずまず元気だったので、突然の閉院通知に「何事ならん?」と駆けつけてびっくり。新たに肝臓への転移が分かり、一切のがん治療をやめてホスピスに入るという決断を聞かされ、言葉を失つた。

Mさんは行きつけのバーの常連客として知り合つた。元来、歯には自信があつたため特に世話になることもなかつたが、二十年ほど前、話の成り行きから歯の健康談義を交わしたことがあつた。

「二十本以上の歯があれば美味しく食事ができます。今、八十歳の人で二十本以上の歯を持つ人はわずか一五%。歯科医師会と厚労省では八十歳になつても二十本以上の歯を持つといふ『8020運動』を展開しています」

れてしまつた。

「あらうとしては食事が苦痛になつてゐるグラ

グラした歯を一刻も早く抜いて楽になりたいのだ。思い余つて、行きつけのバーが閉店してからは交流が途絶えていたM医師に連絡をとつた。

だ。思い余つて、行きつけのバーが閉店してからは交流が途絶えていたM医師に連絡をとつた。

らは交流が途絶えていたM医師に連絡をとつた。明日朝、来いと言つう。

「一本は相当悪くなつてゐるのですが抜いた

がいいですね。もう一本は治療を続ければ暫くは持つでしょう。しかし、いざれば」

「二本の際、二本とも抜いてください。もう堪えられません。『8028』は諦めました」

「何ですか、『8028』って？」

「あれ、忘れたんですか？ 表彰状をくれるという話を」

「そんなん」と言いましたかね。といふで幾つになられました？」

「ホスピスですか。凄い決断ですね」

「七十九歳です。あなたより五年先輩

「あと一年でしたか。残念でしたね。こうなつたら残りの一十六本を大事にしてください。次の目標は米寿での自前二十六本を目指す『8

826』つてことにしたらどうですか。そのた

めには二か月に一回、メンテナンスに通つてください」

初めの一年はきちんと通院していたが、二年

目となり、半年ばかりサボつていたところへの

「閉院通知」だつた。

駆けつけた私にMさんは静かにいつた。

「がんの治療はもうしません。ゆくゆくはホ

スピスになります。予約しました」

これまで私は一度、三度と手術を繰り返したり、抗がん剤治療や血液療法など、がんと闘う親族、友人の姿を多く見てきた。一切の治療をやめ、身体的苦痛や死への恐怖を軽減する施設であるホスピスを選択したのはMさんが初めてだ。決断の重さに触れ、胸の奥がずしりと痛んだ。終末を見据えているMさんに激励とか慰めは意味をなさない。

た一言だつた。「良い新年を」の言葉も飲み込み、敬意を込めた直立不動で拳手の礼をしてその場を辞した。

明けて令和七年。正月も半ばを過ぎ、世の中が落ち着き出した頃、どうしてもMさんの思いのほどが聞きたくて電話をした。

「ホスピスって、そんな大層な決断ではありますんよ。回復の見込み0%と言わなければ、当たり前の選択じゃないでしようか。吐き氣があつて五キロ痩せました。やがて動けなくなるでしょから、自宅を出てホスピスに入ります。今年のサクラ、見れますかね」

淡淡とした口ぶりに、またまた返答に詰まつた。Mさんは毎日何を考え、どんな景色を見ているのだろう。

終末を見据えた人には何を話題にすればよいのか。ホスピスのボランティアってどんな会話をするのだろうか。学習不足を後悔した。